

5. 底質の粒度組成及び底生生物調査

本年度は図4に示す水路部 st. 1～5の5地点で調査した。

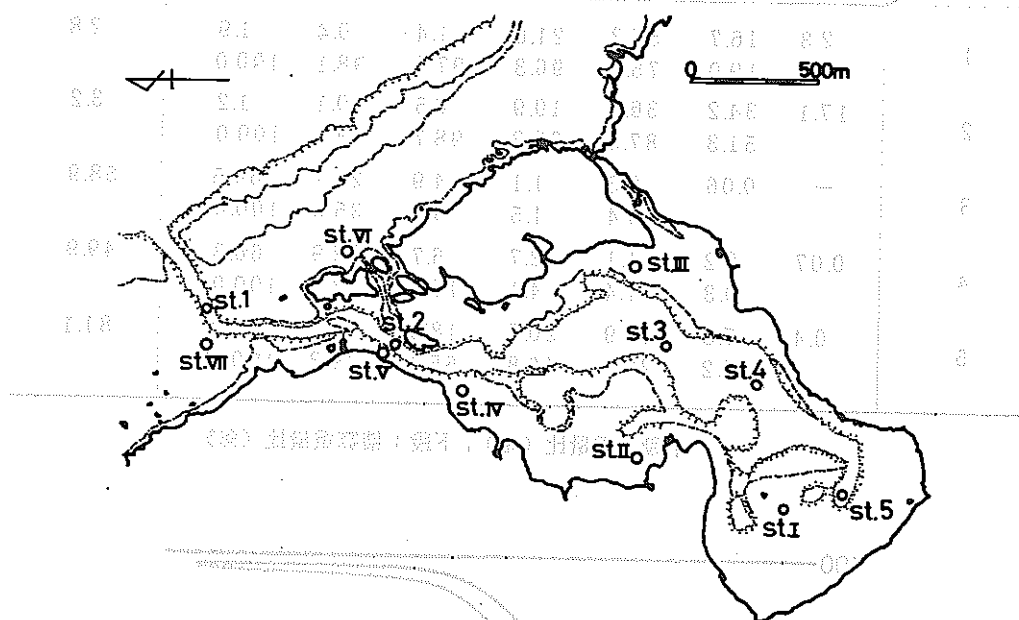


図4 粒度組成及び底生生物調査地点

(1) 粒度組成

1986年8月29日に区域内水路部5地点で採泥し、底質の粒度組成を調べた。採泥にはエクマン・バージ型採泥器 ($1/50 \text{ m}^2$) を使用した。

その後の処理方法は前年度と同様である。

測定に用いた標本重量は st. 1 が 311.1 g , st. 2 が 292.3 g , st. 3 が 183.7 g , st. 4 が 137.4 g として st. 5 が 164.6 g であった。

結果は表8と図5に示した。

st. 1 と 2 においては粗粒砂 ($500 \sim 1,000 \mu\text{m}$) 以上の比率が高く、st. 3 と 4 では逆に細粒砂 ($63 \sim 125 \mu\text{m}$) 以下の比率が高かった。

表 8 川平湾底質の粒度組成

Station No.	Size (μm)	1,000	500	250	125	63	63 >	HCl 処理後残留率(%)
	>2,000	2,000	1,000	500	250	125		
1	2.3	16.7	56.3	21.0	1.4	0.4	1.9	2.8
		19.0	75.3	96.3	97.7	98.1	100.0	
2	17.1	34.2	36.0	10.9	0.5	0.1	1.2	3.2
		51.3	87.3	98.2	98.7	98.8	100.0	
3	—	0.06	0.3	1.1	4.9	29.1	64.5	58.9
			0.4	1.5	6.4	35.5	100.0	
4	0.07	0.2	1.1	2.7	6.7	22.9	66.3	49.9
		0.3	1.4	4.1	10.8	33.7	100.0	
5	0.4	7.8	17.9	20.7	18.6	14.4	20.2	81.1
		18.2	26.1	46.8	65.4	79.8	100.0	

上段：重量比(%)，下段：積算重量比(%)

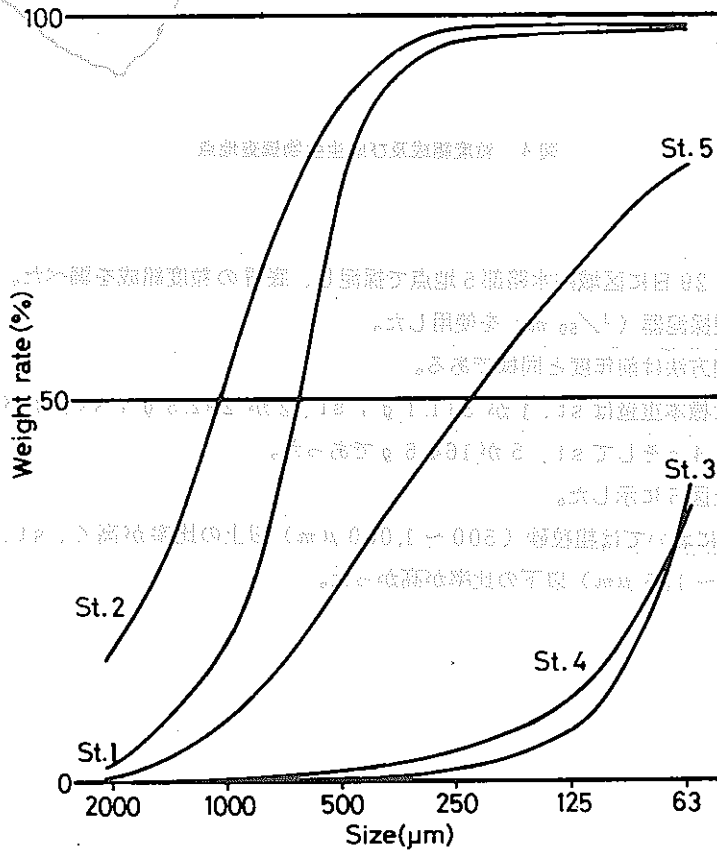


図 5 川平湾底質の粒度組成

st. 5 は粒径値が分散しており、前回（沖水試，1985）と比べて細粒砂（ $125 \sim 250 \mu m$ ）以下の比率が高かった。

塩酸処理後の残留率は st. 3 が前年度より大幅に高くなったのを除いて湾口部が低く、湾奥部へ移動するに従って高くなっており前回と同様の傾向が見られた。

1979年からの区域内浅部（st. I～VII）と水路部（st. 1～5）の資料を表9と図6に参考のため追記した。

浅部はst. ごとの粒径の差が小さいが、水路部は湾口部、st. 1, 2が粗粒砂から極粗粒砂（ $500 \sim 2,000 \mu m$ ）、湾中央部 st. 3, 4がシルト（ $< 63 \mu m$ ）、湾奥部 st. 5が両者の中間の細粒砂から粗粒砂（ $125 \sim 1,000 \mu m$ ）を示した。全体的には各st. における中央粒径値は湾口から湾奥にいくに従って粒径が小さくなる傾向がみられた。

HCl処理後残留率は水路部では湾奥から湾口に向かって次第に低くなる傾向にあり、浅部では湾口の st. V, VI, VII が低く、st. I, IV が高かった。'85年に st. I、'86年に st. 3での増加がみられたのは河川からの陸土の流入や砂の移動等が考えられる。

表9 区域内底質の年別中央粒径値（ μm ）

<浅部>

年 \ st.	I	II	III	IV	V	VI	VII
1979	250~500	250~500	250~500	500~1000	1000~2000	500~1000	500~1000
1981	"	"	"	"	500~1000	"	1000~2000
1983	"	"	500~1000	250~500	1000~2000	"	"
1985	"	500~1000	250~500	500~1000	>2000	"	500~1000

<水路部>

年 \ st.	1	2	3	4	5
1980	1000~2000	1000~2000	<63	<63	500~1000
1982	"	"	"	"	250~500
1984	500~1000	"	"	"	500~1000
1986	"	"	"	"	125~250